

## 南方上座部における名色の解釈について

### 一名と色の相互依存の比喩一

林 寺 正 俊

I. 南方上座部における十二縁起解釈の中で、名色が異熟支分とされながらも実際には異熟・非異熟の両方に解釈されるという特色、及びその教義学的背景についてはすでに考察したが<sup>1)</sup>、本稿では、*Visuddhimagga* (略号 *Vism.*) やその注釈 *Paramatthamañjūsā-ṭīkā* (略号 *Pm.*) において縁起説の名色とは別に説かれている「名と色の相互依存関係」に焦点を当て、その解釈について考察する。

II. 名と色の相互依存関係は、*Vism.* 第 18 章「見清浄の解説」中に説かれている。見清浄という名称の由来が「我見の汚れを清浄にするから」と注解される通り<sup>2)</sup>、本章は「五取蘊がある時に *satta, puggala* という言語表現が成り立つだけであり、勝義としてはただ名色だけが存する」という無我説を主題とする<sup>3)</sup>。具体的には、十八界・十二処・五蘊などに基づいて、あるいは諸部分から成る車や家などの比喩に基づいて、名色を分析し *satta* などの実体がないことを把握する。名の内容は非色四蘊であり、識は心、受想行は心所であるから、名全体としては心的な諸要素を意味する。名と色の相互依存が「名色以外に何もない」という本章の主題を意味していることは言を待たないが、しかし、それだけならば敢えて両者の依存関係までも説く必要はないだろう。名と色が相互に依存し合うと説く背景には、やはりそれ以上の何か別の意義があるはずである。

III. *Vism.* では名と色の相互依存を説く際に五つの比喩が用いられているが<sup>4)</sup>、それらの検討を通してその意義を探ってみよう。比喩の内容は要約して示す。

1. 木の操り人形は命なく動きを欠くが、木と紐の結合によって歩いたり、立ったり、動きがあり作用があるようになる。名と色も同様に、お互いが結合することによって動きがあり作用がある<sup>5)</sup>。(*Vism.*, pp. 509-510).

ここでは素材として木が色に、それを動かす紐が名に喩えられている。この比喩は、*jīva* を欠く名色においても特別な縁により「行く」などという自己の行為が成立することを示す意義があると注釈される<sup>6)</sup>。

2. 二本の蘆束がお互いを依り所として立てられている時、一方が他方を支える

ものとなっており、一方が倒れるならば他方も倒れる。五蘊有における名色も同様であり、死によって一方が倒れるならば他方も倒れる (*Vism.*, p. 510)。

名と色が二本の蘆束に喩えられているが、五蘊有という言葉から明らかなように、この関係は色の存する欲有・色有に限られると示されている<sup>7)</sup>。蘆束の喩は縁起説における識と名色の相互依存を説く *SN*. 12-67『蘆束經』にも現れるが、その注釈によると、識と名色が力無く力が弱いことを示すという<sup>8)</sup>。この場合の蘆束は名と色の相互依存を喩えているわけではないけれども、単独では力が弱いと解釈されている点で、以下に見る4と5の喩の意義と親近性が見られる。

3. 太鼓と音はお互いに混ざり合わないが、太鼓に縁って音が生ずるのと同じように、心基・認識の門(五処)・所縁という色に縁って触を第五とする諸法(識受想思触)が、つまり名が転起する (*Vism.*, p. 510)。

この喩は「色→名」という一方的な関係を示しているが、*Vism.* 著述の際に底本的に利用された『解脱道論』では名色両者の離れない関係を意味するものと解釈されている<sup>9)</sup>。色の中に外界の対象を含む点で他の喩とは異なっているが、触を第五とする諸法(名)の依り所となる色がしばしば注釈文献で業生身(*karajakāya*)と解釈される<sup>10)</sup>ことを勘案すると、心基や五処といった身体に属する色の方に重心が置かれていると見ることができる。

4. 盲人と歩行不能者はそれぞれ単独で移動できないが、盲人が歩行不能者を背負い、歩行不能者が道を教えて、移動可能となる。同じく名と色も単独では力が弱く行為に転起しないが、お互いを依り所として行為を行う (*Vism.*, p. 511)。

盲人が色に、指図する立場の歩行不能者が名に当たる。*Pm.* は「お互いを依り所とすることで名色に自己の行為が成立することも、単独では能力がないことの説明と同じである」と注釈する<sup>11)</sup>。この喩は『解脱道論』<sup>12)</sup>や *Atthasālini*<sup>13)</sup>にも見られるが、いずれも色と非色(名)の相互依存を意味している。なお、サーンキヤ学派で *puṛuṣa* と *prakṛti* の結合を説く際にもこの喩が用いられる<sup>14)</sup>。

5. 船と乗組員がお互いを依り所として航海する (*Vism.*, p. 511)。

この場合、船が色に、意思をもって船を導く人々が名に喩えられるが、この喩は「名色が[単独では]自在でないことを示す」と解釈される<sup>15)</sup>。

IV. 以上のように名と色の相互依存の文脈における喩はいずれも、心的な要素全体(名)と主に身体(色)の相互依存関係を喩えており、その意義も単に「*satta* などが存在せず、ただ名色のみ」という内容を示すだけでなく、何ら実体がなくても名色両者により行為や動作が成り立つこと、五蘊有における名色両者は支

え合って離れない関係にあること、さらに各々が単独では力が弱く、無能であり、自在ではないことをも示すと解釈されているのである。精神的な諸要素と身体の両者によってあらゆる実際上の行為が成立するという内容は、十八界・十二処・五蘊や、部分から成る車の比喻などによって分析的に名色を把握する仕方では決して表すことができず、またしばしば問題とされる縁起説中の識と名色の相互依存が意味する内容とも異なっていると思われ、その点で名と色の相互依存には独特の意義が付与されていると言えるだろう。

使用 Text *Vism.*, ed. by Henry C. Warren, HOS. No.41, rpt., Delhi, 1989.

*Pm.*, ed. and rev. by Rewatadhamma, Varanasi, 1969-1972.

- 1) 拙稿「*Visuddhimagga* における縁起解釈の一考察—特に異熟支分をめぐる問題—」『印度哲学仏教学』第13号, 1998, 131-146頁参照。2) *Pm.*, p. 1397. 3) *Vism.* p. 509 4) これらの比喻は *Abhidhammāvātāra* にも見られる。Cf. *Buddhadatta's Manuals*, PTS, part.1, pp. 114-115. 5) 操り人形の比喻は、注釈文献一般で屈伸を説明する際にも用いられる。その内容は、糸を引っ張ることで操り人形の手足が遊戯する如く、内部に屈伸を行う我 (*attan*) が無くても、心作用と風界の拡大によって屈伸できるというものである。心作用が名、風界が色に相当するから、この場合も名色の相互依存を意味している。Cf. *DA. I.*, p. 197; *MA. I.*, p. 265; *SA. III.*, p. 194; *VibhA.*, p. 359. 6) *Pm.*, p. 1392. 7) 『俱舍論』定品で「無色界にも色がある」という反論者との議論の文脈においても蘆束の比喻は現れるが、そこでも名と色が二本の蘆束に喩えられている。Cf. *AKBh.*, ed. by Pradhan, 1967, p. 434ff. なお、本庄良文「俱舍論註ウパーイカーの伝える『因縁相応』[1]—蘆束経—」『印度学仏教学研究』29-1, 1982, 400-407頁参照。8) *SA. II.*, p. 122. ちなみに、識と名色の相互依存を説く蘆束の比喻がアーラヤ識の存在論証に用いられることについては、榎本文雄『『撰大乘論』無性釈に引用される若干の経文をめぐる—「城邑経」の展開を中心に—』『仏教史学研究』24-2, 1982, 44-57頁参照。9) 「名者以色不離。色者以名不離。如鼓聲」卷11, 『大正蔵』32, 453下。10) Cf. *DA. III.*, p. 722; *MA. I.*, p. 276; *ItA. II.*, p. 10; *VibhA.*, p. 265. 11) *Pm.*, p. 1394. 12) 「唯依名色生。依色名生。如盲跛遠行」卷11, 同, 453下。13) *Asl.*, PTS, pp. 281-282. 色法と非色法(名)の結合によってあらゆる行為が成立すると説かれる。14) “*puruṣasya darśanārtham kaivalyārtham tathā pradhānasya / paṅgy-andha-vaḍ ubhayor api samyogas tat-kṛtaḥ sargaḥ //*” (*Sāṃkhyakārikā* 21); 『金七十論』卷上「我求見三徳 自性為独存 如跛盲人合 由義生世間」『大正蔵』54, 1250中。15) *Pm.*, p. 1399.

(キーワード) 南方上座部, *Visuddhimagga*, 名色, 相互依存, 比喻

(北海道大学大学院研究生, 博士(文学))